

授業時 一人一人が生きる指名をする

算数の時間、練習問題をやった後、みんなで答え合わせをすることになった。Pさんは、「はじめの方の計算問題ならば大丈夫だけど文章題は全然自信ない。分からない問題があたったらどうしよう。」とドキドキしていた。

Q教諭は、Pさんの元気がない様子に気づき、ノートをのぞいた。そこで、分かっていない部分について個別にもう一度説明すると、Pさんは、にこっと笑った。

いつもあまり挙手をしないPさんなので、Q教諭はこの機会に少しでも自信をつけさせたいと考え、この問題をPさんに答えさせたいと思った。

「この問題やってくれる人？」Q教諭は、促すようにPさんと目を合わせた。Pさんは、ゆっくりと手を上げた。Pさんは、指名されると少し心配そうにQ教諭を見ながら黒板に答えを書いた。

「いいです。」友達の正解を告げる声に、Pさんはうれしそうに席に戻っていった。



同じ授業を受けていても、一人一人性格も学習の理解度も異なります。ですから、自分からは恥ずかしくてなかなか手を上げられない子供、何でもいから発言することに喜びを感じる子供、先生が指名をしてくれたら答えようと思っている子供など、様々なタイプの子供が教室の中にいることを念頭に置いて、指名をすることが大事です。

「分かる人」「できる人」より「やってくれる人」

「分かった人？」という質問をすることがよくあります。慎重なタイプの子供は、「分かった」＝「正解を答えなければならない」と思います。そうすると、よほどの確信がない限り答えることを躊躇してしまいます。「黒板に書いてくれる人？」「終わった人？」というきき方をすることで挙手しやすくなる場合があります。

また、子供の表情をよく見て、その気持ちを生かした指名をしたとき、子供の表現する意欲が育ち、学ぶ意欲につながっていきます。

誰もが活躍できる工夫をする

内容が理解できていない場合には、個別指導をした上で指名すれば、子供は理解できたことを確かめることができ、発表する意欲をもつことができるでしょう。

みんなの前で発言することに慣れていない子供には、うなずきながら聴くなど、教師の受容的な態度が支えとなります。

発言しない子供が、どのような理由で発言しないのかを把握し、その子供に適した指名の仕方や言葉を工夫することによって、誰もが活躍できるようにしたいものです。